

豊明希望チャペル礼拝

2026/7/26

「愛には偽りがあってはならない」

ローマ人への手紙 12 : 9～13



今日の箇所を読んでいただいて、どこかに似ているなど思われたと思います。愛の章と呼ばれる I コリントの手紙 13 章です。一部ですが抜粋(ばっすい)して、今日のローマ人への手紙と並べると、何か気づくことがあるでしょうか。

I コリント 13 章は、愛は〇〇である。愛は何々だ。愛はこうしない・・・うんぬんと、「愛」を説明する、定義する言い方になっています。

それに対して、今日のローマ人への手紙の愛の箇所は、たと

えばここ 12 : 10 では、「愛を持って・・・互いに尊敬しあいなさい。」

「しなさい」と命令形になっています。これは、見ていただくと分かるのですが、13 節まですべて、仕えなさい。祈りなさい。もてなしなさい。という命令形となっています。まるで、モーセの十戒のようにです。

ちなみに、どうでもいいのですが・・・中森明菜という歌手の歌で、『十戒』という歌があつて(若い人は知りませんね。すみません。)、その歌の中で、「すぐに愛を口にするけど、それじゃ何も解決しない」とか、「優しさは軟弱さの言い訳な

のよ」と、愛や、優しさを、批判して、その本質を問うこの歌の題を十戒とつけたのには、聖書の解釈があるのでしょうか・・・

脱線しましたが、I コリント 13 章は、歌になぞらえて愛の賛歌と呼ばれ、今日の箇所は、それに対して愛の戒めと呼ばれ、また、愛の十戒とも言われる箇所であります。

最初からみていきましょう。特に、この最初の聖句は、十戒の第一戒、最初の聖句、出エジプト記「20:2 「わたしは、・・・あなたの神、【主】である。20:3 あなたには、わたし以外に、ほかの神があつてはならない。」が、十戒全体の前提であり主題であるように、今日の箇所、愛の箇所の前提であり、まとめであるような聖句でありますから、少し集中して聞いていきたいと思っています。

「12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。」

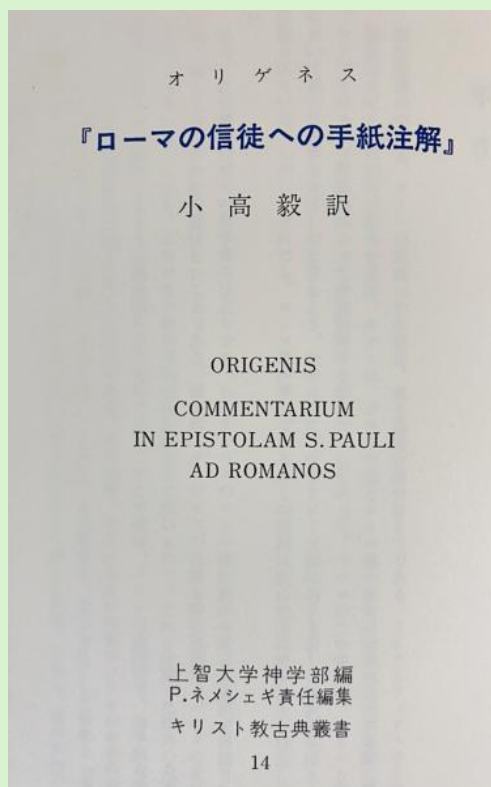
特に最初のところ、「愛には偽りがあってはなりません。」は、すぐに愛だ愛だと、口には出すけど、行いの伴わない愛であり、優しさや軟弱さの表面だけの愛で、行いと中味がともなわない(中森明菜『十戒』の歌詞)、すなわち、「偽りの愛」だということになるでしょうか。

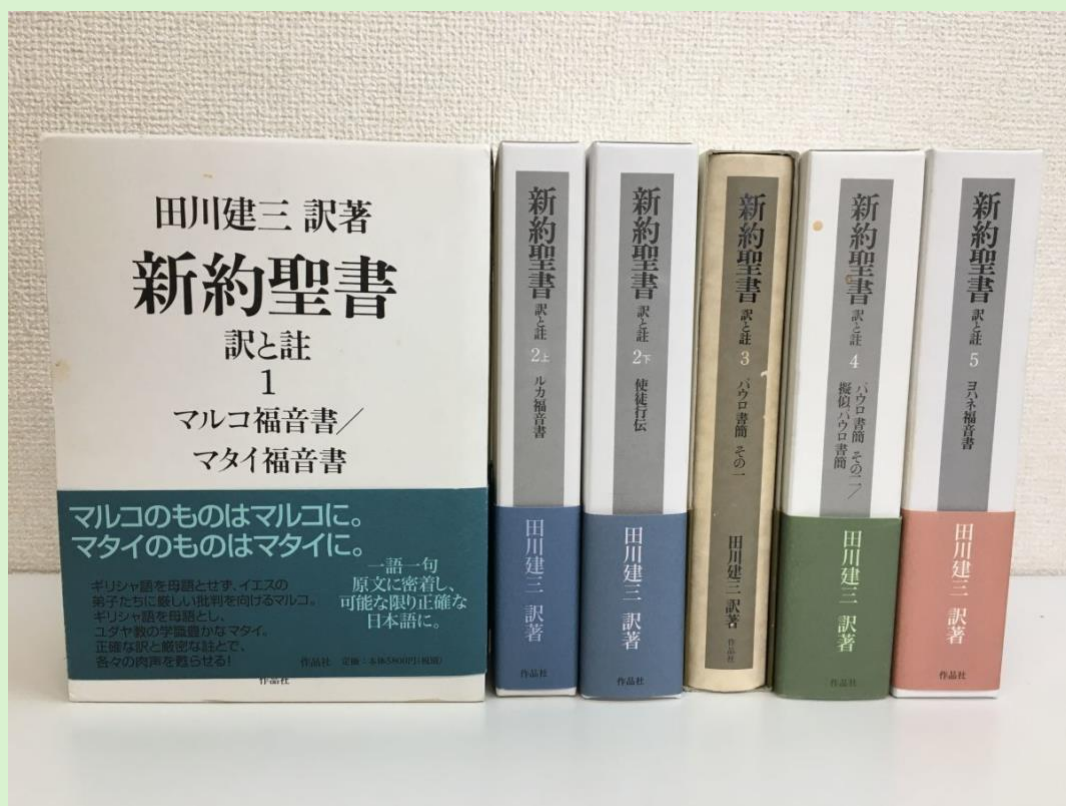
「偽り」すなわち、嘘があつてはならないと言うのです。そして、これは、ローマ人への手紙では、命令形として語られることによって、クリスチャンの生き方として、クリスチャンが愛を語るなら、あるいはクリスチャンが愛を行うなら、まずは、ここがキーポイントだと、始まりだと、前提だと語られているわけで、クリスチャンが必ず、身につけておかねばならない性質、クリスチャンの本質で、必要なら努力し、あるいは、祈り、身につけねばならない条件だと言うのです。

前回、ローマ人への手紙から教えられたとき、オリゲネスという2世紀に生まれた(182~251)方の解釈を紹介しました。

8節の「施し」という言葉を解釈して、それは、今でもボランティアの精神に通じる深い理解ですが、「施しをする場合・・・単純素朴な心でそれをなさねばならないと言うのであります。・・・つまり、困窮のうちにある人々に親切にしているように見えるが、その本心は人々の称賛を求める者でないようにしなさいと言うことです。」と、相手の気持ちに負担をかけないような施しでなければならないと、施しの本質、愛の本質をこそ問う内容だと紹介しました。彼の今日のところの解釈も紹介しておきます。こう彼は言います。

「(ここ9節で言われている愛が、偽りのない愛だと言う時、たとえば)身近な人を愛するにしても、その人が道を外しているのを見ても、注意せず、正さないことだ」と注釈し、強調して、「(このように注意せず正さない愛の)その人の愛は、偽りの愛と言われて当然で





す。」と言い、かなり厳しく、偽りが無い、嘘が無い愛を命じていることがわかります。

このことは、軽く済ませてはならないのであって、初代教会のクリスチャンのアイデンティティーであった以上、しっかりと黙想し、この 2000 年の教会の歩みの中で薄められ、曲げられていないかを、しっかりと確認しなければならないとも思うのです。

私たちとはまったく考え方を異にするクリスチャンであり、聖書学者ではありませんが、田川健三というキリスト教の神学者が昨年、召されました。キリスト教は、紀元 313 年にミラノ勅令によって、長らく迫害されてきた歴史を終え、公認され、さらにその 80 年後には、国教にまでなる(392 年テオドシウス帝)のですが、その間に、揺れ戻しというか、なんとか、キリスト教公認を取り消し、まして、国教になどならせまいとする動きがありました。田川健三は、この動きを迫いまして、何がキリスト教を嫌わせ、しかし同時に、何が結局キリスト教を押す、キリスト教が国教などとなったのかということを説明しています。

キリスト教に反対したのは、ユリアヌス皇帝(331～363)、まさに、公認から国教化までの間に、キリスト教に抗(あらが)った皇帝(背教者ユリアヌスとも言われる・・・)です。キリスト教優遇政策の廃止、古代の神々の崇拝を、推進しました。そのユリアヌスが残した手紙を、田川健三は引用して、キリスト教は大嫌いだ、三つだけ認めざるをえないことがあると言ったと。それは、「**他者に対する人間愛の実践としての救護事業**」「**死者の弔いの丁重(丁寧)さ**」「**真面目な生活倫理**」だと。

私は、前回も、2 世紀に、しっかりと、分け与え、慈善の精神が生きていたのだと、オリゲンネスの書から言いましたが、4 世紀になってなお、キリスト教は、反対者の

口を通して、「他者に対する人間愛の実践」が、あったんだなあ嬉しくなるのです。

「この 2000 年の教会の歩みの中で薄められ、曲げられていないか」と、問いましたがどうか。偽りのない、嘘のない、心からの愛が、私たちの身に付いているのでしょうか・・

今一度確認したいのです。

「12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。」

後半の「**悪を憎み、善から離れないようにしなさい。**」、悪を憎む。悪に妥協しないということでしょうか。私たちは、力のあるものにあこがれます。それがたとい悪であっても、正当化しようとする傾向があります。私は、悪は、本当に身の毛もよだつほど嫌いだとは、案外ならないのではないかとも思うのです。

また、パウロが、愛の性質の一部のように「善から離れないように」というとき、善をこそ好み、ちょっと悪もやってみようか・・かっこいいじゃんとは、ならない。善、良い事、あらゆる良いと言われることに、ピタッと寄り添って離れない。クリスチャンは、そういう性質であれ、身の一部であれということです。

今一度、繰り返します。「**愛には偽りがあってはなりません。**」

クリスチャンのその愛が本物でなければならないという事でもあります。



昔、朝ドラで、『まれ』というドラマがありました。ケーキ屋さんで修行する一人の女性の話です。彼女に課せられた課題のケーキは、「ジュテーム・ノア・モン・プリュ」というケーキでした。しかし何度やっても、合格しない。全部ゴミ箱に捨てられてしまう。最後に行き着いて、完成したケーキも、ジュテーム・ノア・モン・プリュが大人の恋のケーキであれば、主人公まれの作ったそれは、小学生の男女のおつきあいの味だといって、半額で店頭に出せと言われる。そして、主人に言われるのです。たとえば、うちのケーキ屋さんは、モンブランではどこにも負けませんというのであれば、どこにも負けないこだわりとノウハウを、その栗の選別から始まって、砂糖はどの

ものを使うのか、その混ぜ具合と、火を入れるタイミング、消すタイミング、そのすべてにおいて、最高のものでなければならない。そうでなければ、「ジュテーム・ノア・モン・プリュ」ではないと。

私は、そのドラマを見ていて、私の愛が、「ジュテーム・ノア・モン・プリュ」ならぬ、偽りでなく、悪の味がしない、ひたすら善のきよき味である、その愛かと考えていたのです。少なくとも、言いたいことは、ここでいわれていることを、いい加減な気持ち、簡単だよ、愛せるよなどと、軽く考えていないかと、1年計画、10年計画でそれは、めざし、祈り、実践を繰り返して身につけていくべきものだ、常に祈り、常に求め祈り続けなければならないと思ったのです。みなさんはどうでしょうか。

さて、最初の聖句に集中してきました。今日与えられている13節までの残りの箇所を読みます。

「12:10 兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。12:11 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。12:12 望みを抱いて喜び、苦難に耐え、ひたすら祈りなさい。12:13 聖徒たちの必要をともに満たし、努めて人をもてなしなさい。」

たくさんの良い示唆と、教えが、命令として語られます。

：10 愛はまず兄弟愛。相手を尊敬することをもって愛する事。

：11 愛の前提として、誠実で熱心な信仰生活がある事。

：12 愛が、忍耐強い、あきらめない恒久的なものであるべき事。

：13 愛が、聖徒らへの具体的な行い「旅人のもてなし」であるべき事。

色んな面で、繰り返し、暗唱するほどに、多くの要素があるように思いますが、一点だけ強調しておきます。それは、13節です。ここにあるのは、聖徒への必要を満たすことと、努めて人をもてなすようにと言う教えですが、当時、これが言われたとき、信仰者は、いわゆる「**旅人のもてなし**」の事だなと理解したようです。というのも、パウロのような旅をしながら、福音を説き、聖書を教える人が多かったからです。さらには、エルサレムでの迫害によって、散らされていった放浪のクリスチャン家族、パウロの伝道によって、曖昧(あいまい)さから決別して、迫害する人々と、故郷を捨てて、家族を連れて旅に出た人たちもありました。旅人をもてなすことは、ですから、教会にとって、クリスチャンにとって、生命線であったのです。

初代教会、オリゲネスはこの「もてなし」のテーマでこう言います。

「(もてなしを考える場合)旅人を待っているだけではいけない。旅人を捜し回って駆けつけ、適当な場所がなければ屋外でもてなす事が出来る用意をして出て行く。」と言いまして、寄ってくれたらもてなすよではなくて、もてなしを必要としている人を探しつけ、そこで、必要とする人をもてなしてこそ、本物のもてなしだと。さらには、「旅人をして、誰が自分を助けてくれるか、自分をもてなしてくれる人かと、探していたら、(看板でもかかげて、私がもてなす人ですよ！私がもてなしたいと思ってますよ！)と、あなたから、近づいていかねばならないと言います。

東京オリンピックの招致で、『おもてなし』が、強調されていました。しかし、この言葉の意味として、これほどの、もてなしを誰が想像するのでしょうか。

クリスチャンは、キリスト教を否定する人をもってしても、他者に対する人間愛。また、もてなしの精神とその実践は、否定しえないキリスト教徒の長所であったことを、今一度記憶に刻みたいとも思うのです。10 節に兄弟愛をもってともありました。



昔、ペンシルベニア出身の M 宣教師を訪ねて、ペンシルベニアのフィラデルフィア（独立宣言書が起草された町。アメリカのアイデンティティーのような・・）の駅で降りた時、先生が、私に、このフィラデルフィアとは、その意味が兄弟愛という意味から来ていると言われて、先生が、学生時代をこのフィラデルフィアで送ったが、この兄弟愛の町は、一時、最も治安の悪い町となって、自分にとっても悪い思い出だけだと、苦しそうに言われたことを思い出します。

青梅で牧会をしていたとき、130 年続く教会の、牧師就任式に出席しました。口は悪いけれど愛のある一人の親しい牧師の挨拶の番になって、「今日はおめでとうございます。ただ、今のこの現状に満足しないで、10 年後を目指して頑張ってください。」と挨拶をされました。ちょっと、今の教会をディスっているように聞こえて、私は、隣に座るその先輩の牧師の膝に、膝デッポウを軽くあてて、「先生やめてくださいよ」とつぶやくと、「このくらい言わなかったらこの教会はきっと潰れてしまう・・」と言われました。

愛を学び、愛に生きるクリスチャンであることを誓う、この教会、そして、私たちはどうでしょうか。たしかに、地の塩、世の光として、御言葉に教えられた大切な愛の役割を、この週も、この世で、ここから、私達も出て行きましょう。